

# ジョージ・A・バーミンガムの演劇 『ジョン・リーガン将軍』再評価

—ジョージ・バーナード・ショーとの関係を通して—

八 幡 雅 彦

A Reappraisal of George A. Birmingham's Drama, *General John Regan*:  
Through an Investigation of Birmingham's Relationship with George Bernard Shaw

Masahiko YAHATA

## 【要 旨】

ジョージ・A・バーミンガムの演劇『ジョン・リーガン将軍』(1913)はロンドン、ニューヨークで上演された時大成功を収めた。しかし翌年、この作品の舞台と見なされているアイルランド西部の町ウェストポートで上演された時、「アイルランド人を侮辱した」と多くの観客から誤解され、暴動が起き劇は途中で中止に追い込まれ、20人以上の逮捕者が出るというアイルランド演劇史上最悪の事件となった。この作品を高く評価した作家に、後にノーベル文学賞を獲得し世界文学史上に永遠に名前をとどめているジョージ・バーナード・ショーがいる。バーミンガムもショーもアイルランドの生まれであるが、もともと祖先はイギリスのプロテスタント教徒であった。『ジョン・リーガン将軍』とショーの『ジョン・ブルのもうひとつの島』(1904)はともにアイルランドとイギリスの関係を扱った演劇であり、アイルランドに対する彼らの複雑な感情と愛着が表現されている。本稿ではショーがバーミンガムに宛てた手紙とふたつの演劇の論考を通して『ジョン・リーガン将軍』の再評価を試みる。

## 【キーワード】

アイルランド演劇 ユーモア 風刺 ステレオタイプ 融和

### 1. はじめに

ジョージ・A・バーミンガム(1865-1950)の演劇『ジョン・リーガン将軍』(1913)はロンドン、ニューヨークで上演された時大成功を収めた。しかし翌1914年2月、この作品の舞台

と見なされているアイルランド西部の町ウェストポートで上演された時、「アイルランド人を侮辱した」と多くの観客から誤解され、暴動が起き、劇は途中で中止に追い込まれ、20人以上が逮捕されるというアイルランド演劇史上最悪の事件に発展した。

しかしこれほどのセンセーションを巻き起こした演劇も今日ではほとんど語られることがない。大きな暴動を起こしたアイルランド演劇といえはジョン・ミリントン・シング(1871-1909)の『西の国のプレイボーイ』(1907)とショーン・オケイシー(1880-1964)の『北斗七星』(1926)<sup>1)</sup>がクローズアップされ、『ジョン・リーガン将軍』はすっかり陰に隠れた存在となっている。

『ジョン・リーガン将軍』を高く評価した作家に、後にノーベル文学賞を獲得し世界文学史上に永遠に名前をとどめているジョージ・バーナード・ショー(1856-1950)がいる。バーミンガムもショーもアイルランドで生まれたが、祖先はイギリス人で、家庭はプロテスタント教徒だった。『ジョン・リーガン将軍』とショーの『ジョン・ブルのもうひとつの島』(1904)はともにアイルランドとイギリスの関係を扱った演劇で、彼らのアイルランドに対する複雑な感情と愛情が表現されている。

本稿では、ショーがバーミンガムに宛てた手紙の分析を通して、ショーがいかにバーミンガムを高く評価していたか、そして『ジョン・リーガン将軍』がロンドンの劇団主宰者に好条件で買い取ってもらえるよういかにショーがバーミンガムのために尽力したかを考察する。次いでこの作品とショーの『ジョン・ブルのもうひとつの島』を比較検討することによってショーがなぜバーミンガムを高く評価していたかを考察する。そしてこれらの考察を通して、今日では忘れられた存在となっている『ジョン・リーガン将軍』の再評価を試みる。

## 2. ショーがバーミンガムに宛てた手紙 -『ジョン・リーガン将軍』上演に向けて の尽力-

ショーがバーミンガムに宛てた手紙は1911年12月15日付けから1912年の2月29日付けのものまで7通が現存している。<sup>2)</sup> それらの手紙からは、ショーが『ジョン・リーガン将軍』が好条件で上演されるためにどれほど尽力したかが

うかがえる。

バーミンガムは『スペインの黄金』(1908)<sup>3)</sup>の成功によって一躍小説家としての名声を博した。アイルランド国教会副司祭J.J.メルドンが親友の退役軍人メイジャー・ケントとともにアイルランド西海岸沖の離れ小島に、スペイン無敵艦隊が残していったと噂される黄金探しの冒険に出かける。彼らはそこで黄金探しのライバルに出くわす。メルドンは、黄金は島に住む老人が所有していることを知り諦めるが、ライバルたちは老人からそれを略奪しようとする。そこでメルドンは隣の島に住むカトリック神父と力を合わせて彼らを撃退する。

この小説を賞賛したロンドンの演劇代理人ゴールディング・ブライトが、1911年11月23日、バーミンガムに手紙を出し「あなたの小説の登場人物は演劇に登場しても非常に新鮮で、きっと成功を取めると確信します」と述べ、メルドンを主人公にした演劇の制作を持ちかけた。<sup>4)</sup> このことに関してバーミンガムは、トマス・ハーディーが会長を務め、ショーをはじめ、H.G.ウェルズやラドヤード・キプリングら当代一流の作家たちが所属している「作家協会」に相談をしたところ、秘書のハーバート・スリングから、ゴールディング・ブライトなら大丈夫だと太鼓判を押す12月5日付けの手紙がバーミンガムに届き、「あなたに呈示される契約に関してアドバイスが必要であれば、喜んでさせていただきます」と付け加えた。<sup>5)</sup>

その後、バーミンガムはメルドンを主人公にした演劇を書き始め、ブライトは12月20日付けのバーミンガム宛ての手紙の中で、「J.J.(=メルドンの愛称 \*筆者注)を主人公にした演劇に取り掛かっていると伺いし、非常に嬉しく思っております」と述べた。<sup>6)</sup>

バーミンガムは完成した演劇を『ジョン・リーガン将軍』と名付けて原稿をブライトに送ったところ、彼は、1912年1月1日付けの返事の中で「『ジョン・リーガン将軍』ほど素晴らしい作品ならば、私はあなたが提供して下さるどんな演劇でも快く受け入れます。昨日読んで、私は今まで経験したことがないほどの楽

しみを味わいました」と絶賛した。そしてそれと同時に話をもう少し長くして欲しいと注文した。<sup>7)</sup>

この後でショーは1月6日にバーミンガムに宛てた手紙の中で、『ジョン・リーガン将軍』の上演が成功するためにはどんな協力も惜しまないことを申し出た。「あなたは、あなたの演劇に最大の敬意を払うべきです。きっとあなたの演劇は貴重な財産になるでしょう。劇中人物の会話は非常に効果的です。私は声を出して読んでみました。すばらしいです」とバーミンガムの演劇を称賛したうえで、代理人ゴールディング・ブライトに対する警戒心を次のように述べた。「G.B.は他の代理人よりも決して悪くはありません。しかし彼の第一の関心はあなたの稼ぎから10パーセントを得ることなのです。…私が契約書を見ないうちは決してサインしないで下さい。そして、もちろん何も約束しないで下さい」さらに続けてショーは、イギリス人俳優ではメルドンを演じることはできないだろうから最適のアイランド人俳優を見つけ出すのを手伝うと約束し、「困難にぶつかって助けが必要な時にはためらわずに私を利用して下さい。私も今まで同じように助けられて来ましたので、今回は借りを返そうとしているだけです。特に今はあらゆる手を使ってあなたを騙そうとする代理人がいるので、あなたは誰かの力を借りる必要があります。どうぞ私に頼って下さい」と申し出た。<sup>8)</sup>

ブライトがこの演劇の原稿をロンドンの3人の劇団主宰者に送ったところ、3人とも1週間以内に読み終え、いずれも高く評価した。その中で上演に最も強い関心を示したヘイマーケット劇団の主宰者チャールズ・ホートレイとブライトは交渉を進めてゆくことになった。<sup>9)</sup>

その後、ブライトとホートレイの間で契約書の草稿が作成され、そのことを知ったショーは、2月10日、バーミンガムに契約書を一刻も早く見せて欲しいと催促する手紙を出し、「彼らを信頼しないで下さい。私に契約書を送って下さい。もし納得ゆくものであれば損害は被りませんが、そうでなければ何かの損害を被る可

能性があります。H.(=ホートレイ \*筆者注)は金儲けに熱心で良心に欠けます。B(=ブライト \*筆者注)は道で待ち伏せしている熊のような恐ろしい存在です」と警告した。<sup>10)</sup>

しかしバーミンガムは契約書の内容を口頭で知らされただけの模様で、それをショーに伝えた。するとショーは2月14日付けのバーミンガム宛ての走り書きの葉書の中で、「とても納得のできる条件ではありません。興行収入が1週間400ポンド以下であれば印税5%、400ポンド以上800ポンド以下であれば7.5%、800ポンド以上であれば10%が支払われるべきです。興行収入1600ポンド以上で印税10%などというのは完全に人を馬鹿にしています」と述べ、再び「私に契約書を見せてくれた方がいい」と催促した。<sup>11)</sup>

その後、2月16日にショーは改めてバーミンガムに手紙を書き、「この前の走り書きの葉書に付け足して申し上げます。G.B.がH.との交渉を優位に進めていけるとは思えません。G.B.は疑いなく善意の人間です。しかし彼は正式に法律の勉強をしたことがなく、彼が交渉する劇場支配人に気に入られようとしているだけなのです。興行収入1600ポンドでわずか印税10%というのが、ひとかけらの良心もないことを示す紛れもない証拠です」と述べた。<sup>12)</sup>

さらにはショーが属する作家協会の秘書のスリングも翌日バーミンガムに手紙を書き、「契約書を転送いただければ幸いに存じます。はっきり言えることは、金銭的にあまり良い呈示ではないということです。しかし実際に契約書を見ないうちは法律に基づいた回答を差し上げることは不可能です。もちろん興行収入1600ポンドで印税10パーセントということ自体は話にもなりません」と一刻も早く契約書を見せて欲しいと依頼した。<sup>13)</sup>

そして代理人ブライトは2月20日付けの手紙とともにやっとバーミンガムに契約書を送った。その中で彼は、作家協会のスリングからの契約書に関する不服について、「契約条件は正当なものではないという作家協会の秘書の言葉が私にはまったく想像ができません。私の何年

間にも及ぶ経験の中で、演劇の経験が浅い作家に呈示された契約でこれ以上好条件のものに出会ったためしはありません」と反駁した。<sup>14)</sup>

バーミンガムから転送されてきた契約書に目を通したスリングは、2月23日付けの返事の中で「1週間の興行収入500ポンドで5%、500ポンド以上で7.5%、800ポンド以上で10%が正当な印税」と回答した。<sup>15)</sup>

翌24日、ショーもバーミンガムに長い手紙を書き送り、「演劇に関しては経験が浅い作家であろうとなかろうと関係ないということあなたを譲るべきではありません。あなたは決して経験の浅い作家などではなく、すでに成功した小説家であるという紛れもない事実があります。それはこの上なく大きな強みです」と述べ、「興行収入1600ポンド以上の場合には12.5%以上の印税が支払われるべき」と主張した。<sup>16)</sup>

スリングとショーの契約書修正案が受け入れられたかどうかは定かでないが、2月27日には代理人のブライトが、『ジョン・リーガン将軍』を上演するハイマーケット劇団の主宰者ホートレイが署名した契約書をバーミンガムのもとに送った。<sup>17)</sup> そしてバーミンガムはその内容を了承し、ブライトが捺印しホートレイのもとに送り返した。その後、ブライトは3月16日付けのバーミンガム宛ての手紙の中で契約が正式に成立した旨を伝えた。<sup>18)</sup>

しかし最終的な契約書が作成されたことを知らないショーは、2月29日にもバーミンガムに走り書きの葉書を出し、「スリングと私に仕事を任せて下さい。私も委員会に属しています。それは彼と私両方の仕事です。あなたのために解決して差し上げます」と最後の最後まで尽力を惜しまなかった。<sup>19)</sup>

### 3. 『ジョン・リーガン将軍』がアイルランドで巻き起こした暴動

『ジョン・リーガン将軍』は、バーミンガムにとっては『エレナーの企て』(1911)に次ぐ2作目の演劇だった。<sup>20)</sup> 1913年1月9日、この演劇がロンドンのアポロ劇場で初演された

時、観客も批評家たちもこぞって絶賛し、多くのイギリスの新聞は「非の打ちどころのない3幕風刺劇」「活き活きとした上等の風刺劇」「この上ないユーモア」「最高の冗談」と書き立てた。この演劇はその後も連日の大入りとなり、途中6月に短期間の休演をはさんで9月9日まで続くロングランとなった。そして11月にはニューヨークのハドソン劇場で上演され、その後はリバティー劇場で12月21日まで上演され、アメリカでも絶賛された。<sup>21)</sup>

しかしこの演劇が翌1914年、この作品の舞台と見なされているアイルランドのウェストポートで上演された時、アイルランド演劇史上最悪の暴動が起きた。

実はこの演劇がロンドンで上演されている時、ウェストポートでの暴動を予感させるような出来事があった。この演劇を観たひとりのアイルランド人がアイルランドで発行されている『ナショナル・ウィークリー』に痛烈な批判の手紙を書き送った。それは1913年の2月1日号に、「ロンドンの一演劇に対する抗議」というタイトルで掲載され、「アイルランド人の医者、アイルランド人の神父、アイルランド人の農夫の描写にはひどい悪意が込められていると私は思います。彼らは金に対する強欲から次々と欺瞞を働き、この上なく卑しくあさましい無学のアイルランド人の性質をイギリスの一般大衆にさらけ出しています」と述べた。<sup>22)</sup> 『ジョン・リーガン将軍』のアイルランド公演はふたつのイギリスの劇団が行った。そのうちのひとつ、W.ペイン・セルドン劇団は1914年1月26日にキルケニーで初演の後、ゴールウェイ、キャスルバーでの上演を経て、2月4日にウェストポートで上演を行った。

キャスルバーでの上演は、地元の著名なナショナリストが「アイルランド人に対するこのうえない誹謗と侮辱」と評したように大きな反感を買った。<sup>23)</sup> そしてウェストポートでの上演の数日前、町の壁には「ジョン・リーガン将軍に対する警告。ロンドンで神父を笑いものにした演劇を観ないように」という脅し文が掲示された。<sup>24)</sup>

この演劇の中には、登場人物のマコーマック神父が旅籠の経営者ティモシイ・ドイルにそのかさされてウイスキーを密かに飲むシーンがあるが、アイルランドでの上演ではこのシーンはカットされた。

ウェストポートの上演では暴動がおこることが懸念されたので警官が会場であるタウンホールの内外に配置された。幕が開くや否や数多くの観客が激しいヤジを飛ばし始め、俳優たちのセリフが聞き取れない状態に陥った。第2幕が開き、マコーマック神父を演ずる俳優が舞台上に登場すると同時に、暴徒たちが舞台上に飛び上がりこの俳優に襲い掛かり、衣装をずたずたに引き裂いた。警官が警棒で暴徒たちを制止し、俳優たちは舞台から逃げ去り、劇は中止に追い込まれた。暴徒たちの数は膨れ上がり、彼らは椅子その他のものを警官に投げつけた。暴動は劇場の外でも続き、暴徒たちは、俳優たちが逃げ

帰った宿泊先のホテルに石を投げ数多くの窓ガラスを割り、罵詈雑言を浴びせかけた。暴動は真夜中まで続き、20人以上が逮捕されるという、前にも後にも例を見ないアイルランド演劇史上最悪の暴動となった。

#### 4. 『ジョン・リーガン将軍』の真の意図は

『ジョン・リーガン将軍』の舞台はバリモイというアイルランド西部の架空の村で、ウェストポートが舞台だといわれている。

ある夏の暑い日、ホレイス・P・ビリングと名乗るアメリカ人が大きな乗用車を運転してこの村を訪れ、「帝国ホテル」という名の居酒屋同然の旅籠に部屋を予約する。村の中心部には人影はなく、働いている人々の姿もまばらで、このアメリカ人は旅籠の経営者であるティモシイ・ドイルに、「私は、1週間、この神に見捨てられたあなたの国を旅行して、その沈滞ぶりを見て参りました。しかし今までに見た中ではここが一番沈滞していると思います」と語る。そして「もし自分がこの村を少しでも活気づけることができれば面白い」と付け加える。<sup>25)</sup>

このアメリカ人は地元紙『コナハト・イーグル』の経営者兼編集者であるサディウス・ゴリハーに会い、彼がバリモイを訪れた理由を語る。彼は、この村に生まれ後に南米ボリビアの独立のために戦った「ジョン・リーガン将軍」の伝記を書く予定だという。同時に彼は将軍を記念して建てられた銅像を見たいという。しかし村人たちは誰も将軍のことも銅像のことも知らない。

ここで登場するのが主人公のサディウス・オグラディ医師である。当初、バーミンガムは『スペインの黄金』のJ.J.メルドンをこの演劇でも主人公にする予定だったが、代理人のゴールディング・ブライトからの、主人公は聖職者以外がふさわしいという忠告もあって、別の人物を創造した。彼は、メルドン同様、快活で楽天的でエネルギーに溢れた若者である。彼もまた将軍については全く知らないが、知っているふりをしてビリングをベテンにかけようと企



『ジョン・リーガン将軍』のウェストポート公演が巻き起こした暴動を報道する新聞記事

(Daily Sketch, February 6, 1914)

—Trinity College Manuscripts 3441/37

む。彼はビリングに、地方議会が将軍の銅像建立に関して何年間も議論を続けているとありもしない話をし、ビリングに莫大な寄付金を約束させる。

オグラディ医師の指揮のもと、村人たちはビリングを欺くための陰謀に次々と着手する。ゴリハーは、彼の新聞の中で将軍の銅像を建てる必要性を強調する記事を書く。『スペインの黄金』の中のメルドンの相棒であるメイジャー・ケントがこの演劇の中にも登場する。彼は最初、誰も知らない将軍の銅像を建てることに強く反対するが、結局はオグラディ医師に言いくるめられてペテンの片棒を担ぐことに同意する。

警察署は将軍が子供時代を過ごした家に仕立てられ、ドイルの農場にある廃墟と化した小屋は将軍が生まれた家に仕立てられ、ドイルの旅籠で働くメアリー・エレンは将軍の子孫を演じることになる。

銅像に関してはドイルの甥の彫刻家が制作を依頼される。しかし誰も将軍のいでたちを知らないなので、ドイルの甥の彫刻家は、完成直前でキャンセルされた前アイルランド副総督の銅像を提供する。オグラディ医師は、アイルランド総督を除幕式に招待し、村に棧橋を作るための政府補助金を要求し、そしてそれを他の目的に使用しようと提案する。

除幕式当日、村人たちが準備に追われている時、突然、ダブリン城から総督の来訪キャンセルを告げる電報が届く。代わりに除幕式には総督専属副官のアルフレッド・ブラックニー卿が怒り心頭の面持ちでやって来て、オグラディ医師に、総督は将軍のとんでもない正体を知ったが故に来訪をキャンセルしたことを語り、即刻除幕式中止するよう命ずる。村人たちは、陰謀は失敗に終わったと信じ、村は将来大きな借金を背負うことになるだろうとオグラディ医師を激しく責める。しかし医師は、奇妙な論理の議論でブラックニー卿をやり込め、当惑させる。

その時、アメリカ人ビリングが再び現れ、謎の将軍に関する真実を暴露する。そして彼は、

村人たちを一致団結させて自分をペテンにかけようとしたオグラディ医師の獅子奮迅の活躍を称賛し、約束通り彼らに巨額の金を寄付する。そして除幕式も予定通りに行われ、村人たちの大きな拍手で終了する。

果たして『ジョン・リーガン将軍』は、イギリスの観客や批評家たちが述べたようにただ単なるアイルランド人に対する風刺劇なのだろうか。それともアイルランド人の観客がそう思ったように、アイルランド人に対する侮辱なのだろうか。

確かにこの演劇のうちには風刺が見られるが、アイルランド人の観客は、ナショナリストだけでなくイギリス寄りのユニオニストも風刺されているという事実を見落としたように思われる。サディウス・ゴリハーは熱狂的なナショナリストで、事ある毎に彼のナショナリズム思想を吹聴しイギリスのアイルランド支配を弾劾する。そしてジョン・リーガン将軍の銅像の除幕式の時、酔っ払って、楽団が演奏しているアイルランドの愛国歌をイギリスの愛国歌と思ひ込み猛烈に抗議するという無様さを演じる。しかしユニオニストのブラックニー卿に対してもバーミンガムは同様に風刺の矛先を向けている。彼は、オグラディ医師がアイルランド総督を騙そうとしたと思ひこんで、謝罪を要求する。しかしオグラディ医師はそれを無視し、アイルランド総督の役割はただ単なる飾りものなので、将軍の正体が何であれ、除幕式にやって来てスピーチをすべきだと主張する。そしてその他数々の奇妙な理屈の議論でブラックニー卿をたじたじにさせる。その後、アメリカ人ビリングから寄付金を受け取った村人たちは、除幕式を予定通り決行し、ブラックニー卿は、楽団がアイルランドの愛国歌を演奏している時、それがボリビアの国歌だという村人たちの嘘を信じ込み、帽子を脱いで敬意を表する。そればかりかスピーチも強要される羽目になるが、「下手くそ」と村人たちからやじられる。

『ジョン・リーガン将軍』が、ただ単にアイルランド人に対する風刺でもなく侮辱でもないことを示すもうひとつの大きな理由はアメリカ

人ピリングの存在である。もし彼がただの善意の持ち主で、オグラディ医師と村人たちに騙されるのなら、この演劇はアイルランド人に対する侮辱と非難されても当然だろう。しかし実際にはピリング自身も村人たちを騙したベテン師であることが判明し、最終的には彼も村人たちも満足しハッピーエンドで幕を閉じる。

このハッピーエンドをもたらした原動力はオグラディ医師であり、この演劇を通してバーミンガムが最も訴えたかったのは人々の融和に対する真の願いであったと思われる。

バーミンガムは約60年間に聖職者として務めた信仰心の深いキリスト教徒であった。彼の著した神学書のうちのひとつ『キリスト教修道院制度の精神と起源』（1903）の中で、「プロテスタント教徒は人生における獲得と喜びの機会を最大限に、正直に利用することにより、神に対する感謝を最大限に表現することができる…彼は神を恐れ、神以外のなにものにも恐れない人間である」と述べている。<sup>26)</sup> オグラディ医師は、この理想的なキリスト教徒像を体現しているといえよう。

バーミンガムは、旧約聖書中の預言者イザヤに関する伝記『イザヤ』の中で、彼の信念、人間愛、優しさを賞賛し、「完全な絶望の時でも決して挫けない信念を持っている。しかしその背後には愛と優しさ、イェルサレムとその人民に対する愛、そして罪に対してではなく罪人に対する優しさが存在する」と述べている。<sup>27)</sup> オグラディ医師もイザヤと同じように強い信念を持ち、絶体絶命の危機の中にあっても成功を疑わず勇敢に行動する。そしてバリモイと村人たちを愛しているが故に、彼らを一致団結させて共通の利益のために邁進する。

『ジョン・リーガン将軍』は、バーミンガムの深いキリスト教信仰心が彼のユーモアのセンスと効果的に結びついて生み出された作品であり、世界中のすべての人々の融和に対するバーミンガムの真の願いを表現しているといえよう。

## 『ジョン・ブルのもうひとつの島』のうちに見るショーのアイランド観

バーミンガムもショーもイギリスからの移民の子孫としてアイルランドで生まれた。バーミンガムの場合、父方、母方ともに祖先はスコットランド人であったのに対し、ショーの場合、父方の祖先はスコットランド人で、母方の祖先はイングランド人だった。バーミンガムはベルファストで生まれ、ショーはダブリンで生まれ、共に家庭はプロテスタント教徒だった。イギリスの植民地支配下にあったアイルランドの中で、カトリックのアイルランド現地民の間で暮らしたことが彼らの複雑なアイランド観を形作ったものと思われる。

アイルランドに対するショーの複雑な感情を表現しているのが『ジョン・ブルのもうひとつの島』（1904）である。

主人公は、ロンドンで会社を経営するイギリス人の土木技師トム・ブロードベントと彼のパートナーでアイルランド人のラリー・ドイルである。ふたりはラリーの故郷であるアイルランドの架空の町ロスカレンでのホテル、ゴルフ場等の土地開発計画を企てる。この町にはラリーを18年間待ち続ける彼の恋人ノラ・レイリーがいた。ドイルは再会した彼女を冷たくあしらうが、ブロードベントは彼女に強く惹かれ結婚を申し込み、そしてこの町から国会議員として立候補し、アイルランドの独立と発展のために尽力することを誓う。

ショーのアイランドに対する複雑な感情を最も具現しているのがブロードベントである。概してアイルランド人は饒舌で陽気で空想的、イギリス人は冷徹で実利的で現実的というステレオタイプでとらえられがちだが、ショーはむしろイギリスの方が空想的で現実感に乏しく、アイルランドの方が狡猾で現実的であると指摘している。そしてイギリス人ブロードベントを「陽気で、恰幅がよく、お人好しで、ひがまず、そして何よりも仕事も恋愛もうまくやり遂げてゆく」と評し、逆にアイルランド人ドイルに関しては、「幻想を持たず、事実を直視

し、苦労性で勤勉、研ぎ澄まされた知性を持つ」と評している。<sup>28)</sup>

しかしショーはブロードベントを必ずしも好意的にのみ描いてはおらず、風刺的な描写も見られる。ロスカレンから国会議員として立候補することを決意したブロードベントは人々の前で、アイルランドの独立と発展のために尽くすと自らの言葉に陶醉しながら熱狂的に語る。その姿は滑稽でさえあり、ドイルは「あいつはアイルランド人の笑い者になっていることを知らないのだ。そしてアイルランド人の笑い者になっている限りは選挙に勝つ」と揶揄する。<sup>29)</sup> さらにブロードベントは、狂人になって神父の地位を追われたピーター・キーガンの言葉に感動してアイルランドの独立と発展のために尽くすことを固く決意して、この演劇は幕を閉じる。

キーガンの「私には天国と地獄というふたつの国しか存在しない。救済と天罰というふたつの人間の状態しか存在しない。愚かだが賢いイギリス人であるあなた(＝ブロードベント \* 筆者注)と賢いが愚かなアイルランド人であるあなた(＝ドイル \* 筆者注)の間に私は立って、あなたがたのうちどちらに天罰が下るのかは無知な私には分かりません。しかし私は、あなた方に対して平等に心の扉を開かなければ、私の天命に対して不誠実だということになります」<sup>30)</sup>という言葉は、対立を続けているアイルランド、イギリス両国に対するショーの複雑な感情と両国の融和に対する彼の願いを隠喩的に表現しているといえよう。

A.M.ギブスは、「総体的には、『ジョン・ブルのもうひとつの島』は、アイルランドとイギリスに関して、両国の国民性についてのステレオタイプ的な見方を覆す痛烈な風刺劇である。同時にこの演劇は、様々な異なる人間活動の間に、そして人間と神の間に立ちはだかる社会的に構築された障壁が取り除かれるというショーが理想とする社会の姿を文学によって表現している。この演劇は、究極的には、イエイツが言うところの『文化の調和』をショー流の方法で呈示していると見なすことができる」と指摘を



ショーの生家跡 (33Synge Street, Dublin)  
—2014年8月筆者撮影



生家跡に掲げられた記念のプレート (Bernard Shaw, Author of Many Plays Was Born in this House, 26June1856)

—2014年8月筆者撮影

している。<sup>31)</sup>

ショーが重きを置こうとしたのはアイルランド、イギリスに対する風刺なのか、両国の融和なのか定かではない。しかし『ジョン・ブルのもうひとつの島』は、ステレオタイプは存在しない、すなわち国民性で個々の人間を判断することはできないという事実を強調している。その意味でも普遍的な価値を持った作品といえよう。

## 結論—ショーがバーミンガムを高く評価した理由は—

バーミンガムとショーの経歴、そして『ジョン・リーガン将軍』と『ジョン・ブルのもうひとつの島』の間にはいくつかの共通点が見られる。

前述したように、バーミンガムもショーもイギリスからのプロテスタント移民の子孫としてアイルランドに生まれた。バーミンガムの本名はジェイムズ・オウエン・ハネイで、生家は、現在はクイーンズ大学ベルファスト校の事務局となっており、ショー同様、生家跡には記念のプレートが掲げられている。



バーミンガムの生家跡（左端）  
—2007年8月筆者撮影

そしてバーミンガムもショーも家庭の伝統を受け継いだ強固なプロテスタント教徒だった。バーミンガムは、自叙伝『麗しき土地』（1934）の中で、彼の家庭がどれほどイギリスに断固たる忠誠を誓うプロテスタント・ユニオニストであったかのエピソードを紹介している。しかし、それでいながらバーミンガムもショーもアイルランドのナショナリズムに共鳴し、アイルランドのイギリスからの独立を支持した。バーミンガムは「私は決してオレンジマンにはならなかった。私は、人生の大部分、北アイルランドのプロテスタントの同胞が堅持している政治的見解には反対してきた」と述べている。<sup>32)</sup> ショーもまた「私は家庭の伝統に従ってどう猛で威圧的ともいえるプロテスタントである。し

かし、だからといっていかなるイギリス政府も私の忠誠をあててはならない。私はアイルランドの共和主義と独立を心から支持するイギリス人にふさわしい人間なのだ」と彼独特の辛辣な言い回しで述べている。<sup>33)</sup>



バーミンガムの生家跡に掲げられた記念のプレート（James Owen Hannay, George A. Birmingham, Novelist 1865—1950, Born in this House, June16）  
—2007年8月筆者撮影

そしてバーミンガムもショーもアングロ・アイリッシュのプロテスタントであったが故に、ナショナリストであったとはいえ、時にはカトリック教徒に対して批判的な見解を持ち、それを彼らの作品のうちに風刺的に表現したために非難された。ショーによれば、『ジョン・ブルのもうひとつの島』は、W.B.イエイツの要請によってダブリンのアベイ劇場での上演のために書いたが、上演を拒否されたという。劇場の資金力の問題もあったが、主な理由は「その理想に基づいて新しいアイルランドを創造することに傾注している新ゲール運動のいかなる精神にもそぐわなかったため」と述べている。<sup>34)</sup> そしてショーは、この演劇は「本物の昔のアイルランドを容赦なく示している」と断言しており<sup>35)</sup>、やはりアイルランドのありのままの姿を示そうとした『ジョン・リーガン将軍』をなぜ高く評価したかを察することができる。

ふたつの演劇の相違点は、ショーがアイルランド人、イギリス人のステレオタイプを否定しようとしたのに対し、バーミンガムはステレオタイプそのものを描こうとしたことである。

『ジョン・リーガン将軍』のオグラディ医師にしても、『スペインの黄金』のJ.J.メルドンにしても、バーミンガムのユーモア作品の主人公たちは、陽気で、楽天的で、冒険を好むアイルランド人である。それに対し、彼の作品に登場してくる多くのイギリス人は、メイジャー・ケントのように慎重で、保守的で、懐疑的である。しかしショーもバーミンガムも、アイルランド人とイギリス人の融和を心から望んだという点では共通している。

ショーもまた、『ジョン・リーガン将軍』から、バーミンガムの人間同士の融和を願う真摯な気持ちを読みとり、融和を達成するためにはユーモアが不可欠であることを教えられたのかも知れない。

バーミンガムは今日ではあまり語られることのない存在だが、ショーだけではなく、W.B. イエイツ、グレアム・グリーン等の文学者たち、ゲーリックリーグの創始者であるダグラス・ハイド等の政治家たちにも影響を与えた。今後はバーミンガムが彼らに与えた影響も解明することにより、さらに再評価を試みる予定である。

## 注

(使用テキスト)

-George A. Birmingham, *General John Regan: A Play in Three Acts*, licensed by Lord Chamberlain's Office on December 31, 1912, for the Apollo Theatre production, Lord Chamberlain's Papers, No. 1295, London: British Library

- George Bernard Shaw, *John Bull's Other Island* (1907, rpt; London: Penguin, 1984)

- 1) 原題は John Millington Synge, *The Playboy of the Western World* (1907) と Sean O'Casey, *The Plough and the Stars* (1926)。
- 2) *George Bernard Shaw Collection*, Harry Ransom Center, University of Texas at Austin.
- 3) 原題は *Spanish Gold* (1908)。
- 4) "Letter from R. Golding Bright to George A. Birmingham, November 23<sup>rd</sup>, 1911", *Papers of J.O.*

*Hannay*, Trinity College Dublin Manuscripts 3455/444. 以後 TCD MSS と記す。この最初の手紙以降、ブライトは宛名にバーミンガムの本名である James Owen Hannay を用いている。

- 5) "Letter from G. Herbert Thring to James Owen Hannay, 5<sup>th</sup> December, 1911", TCD MSS 3455/447.
- 6) "Letter from Bright to Hannay, December 20<sup>th</sup>, 1911", TCD MSS 3455/451.
- 7) "Letter from Bright to Hannay, January 1<sup>st</sup>, 1912", TCD MSS 3455/453.
- 8) "Letter from George Bernard Shaw to Hannay, 6<sup>th</sup> January, 1912", *George Bernard Shaw Collection*, Harry Ransom Center, University of Texas at Austin.
- 9) "Letter from Golding to Hannay, January 18<sup>th</sup>, 1912", TCD MSS 3455/454. この手紙の中でブライトはプレイハウス劇団 (The Playhouse) を主宰するシ rilル・モード (Cyril Maude) も関心を示したと述べているが、最終的にはヘイマーケット劇団 (The Haymarket) を主宰するチャールズ・ホートレイ (Charles Hawtrey) と契約を結ぶことになった。
- 10) "Letter from Shaw to Hannay, 10<sup>th</sup> February, 1912".
- 11) "Letter from Shaw to Hannay, 14<sup>th</sup> February, 1912".
- 12) "Letter from Shaw to Hannay, 16<sup>th</sup> February, 1912".
- 13) "Letter from Thring to Hannay, February 17<sup>th</sup>, 1912", TCD MSS 3455/469.
- 14) "Letter from Bright to Hannay, February 20<sup>th</sup>, 1912, TCD MSS 3455/471.
- 15) "Letter from Thring to Hannay, February 23<sup>rd</sup>, 1912", TCD MSS 3455/474.
- 16) "Letter from Shaw to Hannay, 24<sup>th</sup> February, 1912".
- 17) "Letter from Bright to Hannay, February 27<sup>th</sup>, 1912", TCD MSS 3455/476.
- 18) "Letter from Bright to Hannay, March 16<sup>th</sup>, 1912", TCD MSS 3455/489.
- 19) "Letter from Shaw to Hannay, 29<sup>th</sup> February, 1912". *George Bernard Shaw Collection* のうちには、ショーがバーミンガムに宛てた7通の手紙の他に、ショーが添削を加えたブライトとホートレイの間の契約書の草稿があるが、実際にショーの添削通りに修正されたかどうかは定かではない。

- 20) 原題は *Eleanor's Enterprise* (1911)。
- 21) Brian Taylor, "George A. Birmingham and *General John Regan*: London, New York and Westport", *Cathair na Mart: Journal of Westport Historical Society*, No. 12, 1992, pp. 90 – 112.
- 22) Anon., "Canon's Insult to Ireland: A Protest Against a London Play", *The National Weekly*, February 1, 1913, TCD MSS 3438/48.
- 23) *The Irish Times*, February 6, 1914, TCD MSS 3441/43.
- 24) *The Irish Times*, March 3, 1914, TCD MSS 3441/45.
- 25) George A. Birmingham, *General John Regan: A Play in Three Acts*, Lord Chamberlain's Papers, No. 1295, p. 2.
- 26) James Owen Hannay, *The Spirit and Origin of Christian Monasticism* (1903; rpt., Whitefish: Kessinger, 2003/4), p. 6.
- 27) George A. Birmingham, *Isaiah* (London: Rich & Cowan, 1937), p. 57.
- 28) George Bernard Shaw, "Preface for Politicians", *John Bull's Other Island* (1907, rpt; London: Penguin, 1984), p. 8.
- 29) *John Bull's Other Island*, p. 137.
- 30) *Ibid.*, p. 162.
- 31) A.M. Gibbs, *Bernard Shaw: A Life* (Gainesville: University Press of Florida), p. 252.
- 32) George A. Birmingham, *Pleasant Places* (London: William Heinemann, 1934), p. 4.
- 33) Shaw, "Preface for Politicians", *John Bull's Other Island*, p. 9.
- 34) "Ibid.", p. 7.
- 35) "Ibid."

本稿は、2013年度～2015年度日本学術振興会科学研究費助成・基盤研究 (C) (課題番号: 25370334、研究課題名「ジョージ・A・バーミンガムを中心に、北アイルランド小説の普遍的意義に関する研究」) に基づく研究成果の一部である。

### [Abstract]

When George A. Birmingham's drama, *General John Regan* (1913), was performed in London and New York, it had great success. However, when it was performed in Westport, a West of Ireland town deemed to be the drama's setting, many spectators conceived

the wrong idea that the drama was blasphemy against the Irish. As a consequence the most violent riot in the history of Irish drama occurred and more than twenty people were arrested. Among those who acclaimed this drama was George Bernard Shaw, who later received a Nobel Prize for literature and forever stamped his name in the history of world literature. While both Birmingham and Shaw were born in Ireland, their ancestors were Protestants from Britain. *General John Regan* and Shaw's drama, *John Bull's Other Island* (1904), deal with the relationship between Ireland and Britain, both of which display the authors' complex notions of Ireland and their hearty attachment of the country. This paper attempts a reappraisal of *General John Regan* through an investigation of Shaw's letters to Birmingham and a comparative analysis of both dramas.

### [Keywords]

Irish drama Humor Satire Stereotype Reconciliation